

武庫川女子大学  
武庫川女子大学短期大学部

第10号

# FDニュース



## ● 目 次 ●

- |   |            |
|---|------------|
| [1] 学科FDの取り組み<br>薬学科  | [3] シリーズ授業 |
| [2] FD推進委員会の活動報告<br>1 本学におけるFD推進活動から見てきたもの<br>2 第1回FD勉強会、FD講演会の報告 | [4] 編集後記   |

## 学科FDの取り組み

薬学科 幹事教授 西川 淳一



薬学教育は大きな制度改革を経て、平成18年度より薬剤師養成を目指す6年制課程と主に研究者養成を目指す4年制課程の二つの課程が設けられるようになってきました。薬学部におけるFD活動は、この制度改革の前に行われた「薬学教育者ワークショップ」に薬学部所属の全教員が参加することから始まりました。このワークショップでは、教育は「学習者の行動（知識・技能・態度）に価値ある変化をもたらすこと」と教わりました。そして、学習者が到達すべき目標を設定し、教える側全員がこの目標を理解した上で、教育の方法、評価法を作り上げていくことの重要性を体得しました。このワークショップで、薬学教育モデル・コアカリキュラムの意味を教員全員が理解し、さらには「教育とは教師が事実であると信じていることを学習者に話し伝えること」ではなく、「学生に意味ある変化がなければ教育したことにはならない」という考え方を学びました。現在も、このワークショップは「薬剤師のためのワークショップ」と名前を変え継続しておりますが、新規に採用された教員は必ず参加することになっていきますし、既にワークショップを経験した教員はタスクフォースとしても参加しています。

また、6年制薬学教育課程の完成年度である平成24年からは、アドバンストワークショップ「学習成果基盤型教育（outcome-based education）に基づいて6年制薬学教育の学習成果を考える」として、新たな取り組みが開始され、本学の教員も毎回参加しています。Outcome-based educationとは、「卒業時の到達目標（学習成果、outcome）を設定し、それを達成できるようにカリキュラムを含む教育全体をデザインする教育法」です。教育カリキュラムを構築する方法を大きく二つに分けるとしますと、「下からの積上げ方式」と「上からの割付け方式」が考えられると思います。積上げ方式は、薬剤師として必要な知識・技能・態度（SBOs）は何かを考え、それを学生に修得させるための方略を作成し、評価するという手順で進みますが、割付け方式では卒業時の到達目標から、それを達成するようにカリキュラムを含む教育全体をデザイン、作成、文書化します。実際には、この両者は密接に絡み合っており厳密に区別することは難しいですが、どちらの比重が高いかを判定することは可能です。こういう視点で眺めてみると、現行の薬学教育モデル・コアカリキュラムはどちらかと言うと積上げ方式であったと考えられます。つまり、4年制薬学教育で行われていたほとんど全ての項目をSBOsに詰め込み、そこに臨床的な項目を追加し、モデル・コアカリキュラムとした感が否めません。そして、学生にこれら全てのSBOsをクリアさせれば、必然的に社会のニーズにあった薬剤師ができると考え、それを実施してきた訳ですが、結果はどうであったか、現在、議論しているところです。6年制薬学教育が完成年度を経過した現時点において、outcome-based educationの視点からカリキュラムを見直すことにより、教育の改善が進むものと考えています。

## FD 推進委員会の活動報告

### 1 本学における FD 推進活動から見てきたもの

平成25年度のFD推進委員会の小委員会である「授業改善・改革委員会」では、前期・後期の授業公開実施宣言を大学合同教授会及び学院HPにて致しました〔前期：平成25年6月17日（月）～平成25年7月20日（土）、後期：平成25年10月8日（火）～平成26年1月20日（月）〕。また、本学は平成23年12月7日、「教育目標実現に向け、自立した学生を社会に送り出すため、主体性・論理性・実行力を培う女子教育に教職員一丸となって取り組みます」とした“武庫川女子大学教育推進”の宣言から2年目を迎えたことから、本小委員会ではこれまでの全学的なFD推進の取り組みから学科FDの推進にフォーカスを絞り、その取り組みを調査しました。

本学では“教育推進宣言”により、学生の主体性を伸ばして自ら進んで学修できる素地を初期演習と2年次演習の工夫によって形成しようと考えています。そこで、各学科における初期演習と2年次演習（学科により実施年度が異なります）の取り組みについて調査をしたところ、学科の特性によって授業の展開が異なるものの、アクティブラーニング（学生参加型授業やPBLを取り入れた授業等）形式の授業展開を実施あるいは計画している学科が殆どであり、まさに教育推進宣言の「主体性・論理性・実行力」を強化するものでした。数年前なら“素晴らしい取り組みを行っている”との評価を受けるでしょうが、今やこれらの取り組みは“当たり前”の時代になってきました。

日本経済新聞のコラム〔平成25年5月23日（木）、“授業改善半ばは“より一部抜粋”に以下の記事が掲載されていました。『愛媛大学では、大学の授業改革の専門家が実際の授業をチェックし、改善点を指摘しているが、こうした取り組みをしている大学はまだ少ない。…ある国立大学教員は「授業方法は教員が決めることだと考え、変更を強制されることに抵抗感を持っている人が多い」と話す。東京大でも教員が授業を互いに見学することすら「ほとんどない」（教養学部の教員）という。』

この記事を読んでいると、武庫川女子大学の教員組織の意識はFDの先進大学に着実に近づいていると感じました。前述しました学科FDの取り組みは、“教育推進宣言”を着実に実行しているものであります。これらの教育を推進することで教員の意識改革がさらに進み、“社会に貢献できる女性”を育成するという本学の教育目標の達成に繋がるのではないかと期待しています。

平成25年12月11日（水）にFD講演会「自立した学びのためのPBLの紹介と対話：ワールドカフェスタイルにて」を開催し、FD推進委員を始め興味を持たれた先生が参加されました。詳細は次ページで報告しますが、いわゆるFD研修と位置づけることもできます。私たちは知識で様々なFDを理解しますが、なかなか行動が伴いません。これは実際に行動していないからです。今回の研修を通じて感じたことは、私たちが授業に導入できそうな取り組みは研修で現場を見て行動することです。

今後、FD推進委員会では、積極的にFD研修会を企画したいと考えています。教職員が同じ方向を向いて教育力を磨いて社会に貢献できる学生を育成しましょう。

(FD推進委員長 渡邊完児)

### 2 第1回FD勉強会、FD講演会の報告

#### (1) 第1回FD勉強会

平成25年度FD推進委員会第1回勉強会は、「学生の自立を促す教育」のための調査及び研究プロジェクト企画実施委員会との共同で、7月3日（水）京都大学高等教育研究開発推進センター長の太塚雄作先生を講師にお迎えし「自立を促す教育における評価の在り方」のテーマで開催されました。

講演は、まず最初に、『『主体的学び』答申への疑問』と題して、平成24年8月に中教審答申に示された内容について分かりやすく解説をしていただきました。授業は比較的真面目に出て、与えられたことはきちんとこなしていく今どきの学生についての実態調査などからのお話でした。さらに、アウンサンスーチー氏の講演を企画開催した京大アメフト部学生達に培われるジェネリックスキル等々についても学生の平素の大学生活を面白く表現しながらお話をしていただきました。本題では、自立につながる主体的学びには内発的動機が大切であり、特に自己効力感は中間の存在が重要であると話されました。

次に、「授業改善とは何か—FD奮戦記」と題して、ご自身の授業「教育評価の基礎」を題材に毎回のポートフォリオ、授業アンケート実施内容を示されてお話をしていただきました。授業は一人だけで改善できるものでなく、教員間もネットワークを構築することが大事であることを述べられました。評価では数値目標を立てるように言われま

すが、大学教育では量的評価だけでなく質的評価が非常に重要になってくることを説明していただきました。「いちばん大切なことは評価してはならない（板倉聖宣）」を紹介され、評価は元気を出していくためのものである。自立につながる自己評価能力育成のためには学生との繋がりをしっかり持っていくことが大切であると述べられました。

その後の討論では、いくつかの事例も出たなかで武庫川女子大学の考える「自立した女性」とはどのような女性か、我々はコンセンサスを持っておく必要があり、具体的にどのような教育・支援をすればよいのかについて、各学科はもちろんのこと大学全体で真剣に考えなければいけない、と結ばれました。（FD推進委員 澤田小百合）

## (2) FD 講演会

FD講演小委員会では、下記のようにワークショップを開催しました。昨年度、「学生の自立を促す教育」についての勉強会を重ねたことに続き、今年度は、学生が能動的に学ぶ授業進行の手法を具体的に習得するワークショップです。手法の1つであるワールドカフェスタイルを用い、テーマを「自立した学びのためのPBL」として、アクティブラーニング形式で進行しました。

### 「自立した学びのためのPBLの実践法紹介 ―ワールドカフェスタイルにて―」

日時：平成25年12月11日（水）16：30～18：30 場所：附属図書館 ラーニングコモンズ C-604

講師：中尾 憲司 先生（日本コーチ協会認定キャリアコーチ、京都産業大学キャリア教育研究開発センター教育プロジェクトスタッフ）

内容：・講演「PBLの特徴と他大学の実施事例の紹介」（約60分）

・ワークショップ「ワールドカフェスタイルでPBLの実践案を考える」（約60分）

### ■「ワールドカフェ」の概要■

必要なもの

- ・ テーマ
- ・ 4～6人ずつのテーブル
- ・ 各テーブルに模造紙、人数分の色のマジックペン
- ・ 飲み物、菓子、花、音楽など、緊張をほぐすものがあるとよい

5分	オープニング	進め方の説明、テーマの紹介、ゴールの設定
5分	チェックイン	4～6人ずつ着席
10分	第1ラウンド	自己紹介。 テーマについて自由に話す。言葉に出た単語、文、絵など、誰もが自由に模造紙に書く。 各テーブル1名を「ホスト」とし、他は「旅人」となる。
10分	第2ラウンド以降 (時間に応じて繰返し)	ホストを残して、旅人は他のテーブルへ。 あらためて自己紹介。ホストが自分のテーブルでの内容について説明。 旅人は前のテーブルで出たアイデアを紹介し、つながりを探求する。 模造紙にも自由に追加して書く。
10分	最終ラウンド	旅人は元のテーブルに戻り、旅で得たアイデアを紹介し継続。
10分	全体セッション	模造紙を壁などに貼り、各ホストが内容を紹介。
5分	チェックアウト	ワークショップ全体についてグループ内で感想の共有。

(FD推進委員 北村薫子)



# シリーズ 授業

## オペラ～共同で作り上げて行く過程から学ぶこと～

演奏学科 教授 森池日佐子

共同担当者：非常勤講師 有吉真知子

ピアノ伴奏 助手 藤江 圭子

オペラは、指揮者・演出家・演奏家、そして照明や舞台・衣装など多彩な専門家集団によってはじめて表現が可能となる総合芸術である。

この授業では、演奏学科4年生が、モーツァルトの3大オペラ「フィガロの結婚」を1年かけて取り組んでいる。配役をオーディションで決めた後、はじめは「音楽稽古」、その後「立ち稽古」を始めて12月の「学内演奏」の場において発表する。「個別の学習」と「共同作業」という2つの過程を経て、ひとつの作品を仕上げていくのである。

まず、「個別の学習」としては、音楽稽古や立ち稽古に向けて練習の時間配分を工夫し、計画的に進めて行く個別の作業がある。担当する役や箇所について自主学習をすすめ、個人レッスンの授業とも連動しながら個々の課題と向きあうのである。

「共同作業」においては、いずれも第一線で活躍するプロと出会い、共演するという、学生にとって非常に大きな刺激となる。そして、一同に集まる指揮者、演出家、演奏家、舞台関係者らと疑問点について盛んに意見を交わしながら、共通の目標に向かってひとつひとつ解決していくのである。オペラはアリアを歌う花形の部分だけでなく、様々な役割があってはじめて成り立つものである。この授業ではひとつの役を数名のキャストで行うが、自分が関わるのがたとえ一部であっても、自分の役に関わる全体とオ



ペラ作品全体を把握していなければ当然成り立たないのである。

卒業後の進路は、演奏家だけでなく教員や一般企業への就職も多い。たとえ競争を経て一握りの演奏家になったとしても、オペラの公演には膨大な経費と人手がかかり、出演できる機会は大変貴重である。そのような状況であっても、音楽に携わる学生や卒業生なら誰もが、これまでに研鑽してきた音楽を社会に活かし一人でも多くの方と音楽を通じて交流したいという願いを持って日々の練習に打ち込んでいるはずである。



オペラの仕上げの段階に入ると、練習を始めた当初からは想像もできないほど、立ち居振る舞いが変化し、一人ひとりに強さと輝きが出てくる。様々な壁にぶち当たり、個々の責任を果たしながらも異なる立場の人たちと共同でひとつの舞台を作り上げる経験は得難いものであり、なによりも自信につながるようである。

4年間の学生生活を振り返って最も印象深い出来事のひとつにオペラの経験を挙げる学生が多いのは、そのためかもしれない。社会に貢献できる人材の育成において、芸術に取り組む過程も少なからず役立つのではないかと考えている。



### 編集後記

「〇〇力」という言葉をよく目にする。「コミュニケーション力」「論理的思考力」「貢献力」などその例は枚挙に暇がない。中でも最近気になる「力」が「耐える力」である。就職試験の応募に在学中の全学業成績の提出を求める会社があるらしい。学業成績の良し悪しではなく、成績の変遷から苦手な科目から逃げずに向き合うことができる「耐える力」を兼ね備えているかを見極めるそうだ。厚生労働省によると、毎年採用者の約15%、5万人前後が入社後1年以内に会社を辞めている。本格的な仕事を任される前にやりたくない仕事に耐えきれず辞めてしまうのだ。やりたくないことにつづったとき、どうそれに取り組み、乗り越えるのかその過程でどのような工夫をするのか。残念ながら授業を学期半ばで放棄してしまう学生がいる。彼女たちに「耐える力」を身に付けてもらうために何ができるのか考えてみようと思う。

(編集委員 MK)

【FDニュース編集委員会】木村麻衣子、西山明美、管 宗次、玉田健二

